

農家益

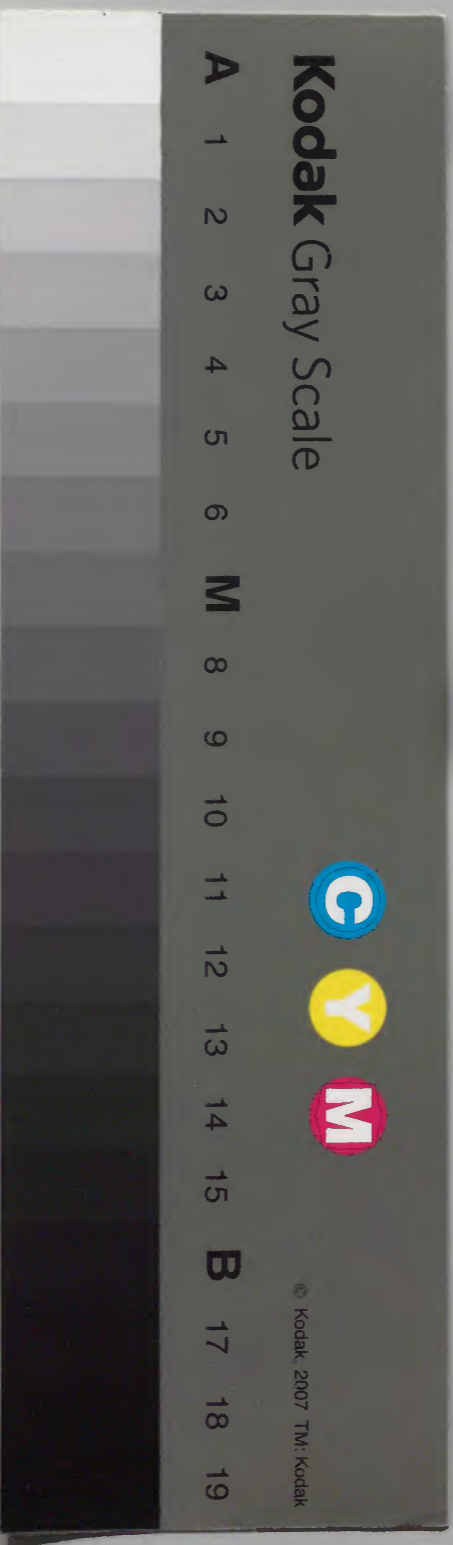
天

農商務省  
圖書  
第十九號  
第九冊  
共

和書門  
三〇三六六號  
一七六函  
六架  
五冊

|      |         |
|------|---------|
| 內閣文庫 | 和       |
| 三〇三  | 和       |
| 八三函  | 和       |
| 六架   | 和       |
| 五冊   | 和       |
| 番號   | 和 30366 |
| 冊數   | 5 ( 1 ) |
| 函號   | 183 237 |

陸産



農家益叙



書曰民惟邦本本固邦寧蓋

民有士農工商之四農最為之

先而其分員勞亦莫如農者是

以近世農變為工商者往往

引之該取謂以貧求富農

不如工、不如商、無他以其貧  
 勞也、有一於此、小賑之以令免  
 其苦、則非亦助治教之萬一  
 耶、蓋聞近年關西諸州之  
 民於農隙植黃檀於曠野  
 陂隄、採其子或製黃蠟而送

都下、得其利者不可勝數、而畿  
 內關東諸州亦間雖有之、而  
 未達其術、故一旦雖作之、半  
 途而廢者多、為豐後人大  
 藏氏永常者、頃者寓於浪  
 美、一日推其所著書、來而

序

二

浪美園藏

示余之閱之則載黃櫨種樹  
 之法及製方之事畫圖以審  
 之其術可謂勤矣余乃以為  
 此書大有益於利民固邦於  
 是咨之池田縣令之甚善之  
 曰使部下民見此書則其道

倍進焉子其勸而梓之於是  
 乎勸永常梓之欲令部下及  
 諸州之民普知斯術而各務  
 其業至於本固邦益安因題  
 曰農家益庶乎閱此書者竭  
 力求之則有達其道矣余



○ 牝綿化法

は巻の何色の國にも出まざる法國此化法風土候分ら委くは

五篇 二冊

○ 藍化法

は巻の津の國に國山城木此化法を委くは

六篇 一冊

○ 楮化法

は巻の苗此化法を楮の法に國結紙の法に委くは

七篇 三冊

○ 桐樹化法

は巻の實苗して苗をしらざる種をの介別種を種を化す

八篇 一冊

○ 杉檜化法

は巻の苗の枝候木此化法に種を伐半一川流して化法

九篇 二冊

○ 雜部

十篇 四冊

は巻の國所土産よりて農具の用紙同國水旱候は此の法  
やうに水此の法にせよと云ふは種をの介別種を種を化す  
事深國候乾く一麦苗仕や種を乃さるや木を介農具  
の益と云ふは此の法を其化法

右著の書に國産と云ふは此の法を其化法  
由杯の無用なる事候は此の法に農家専用と云ふは種をの  
而己を紙國画候は此の法を其化法に種をの介別種を種を化す  
見て候りとも此の法を其化法に種をの介別種を種を化す  
老農より其の法に候は此の法に種をの介別種を種を化す  
種と云ふは此の法に種をの介別種を種を化す

受和園 大藏永常誌



大寶松山松接苗

今... 松山接木の苗... 取券並たる上... の苗は...

○楮苗 ○桐苗

○扱檜苗

右苗... 扱檜苗... 夫を...

佛用車... 徳九氏...

大藏徳...

京都

堀川通...

河内...

書林

江戸

日中...

吹原...

大阪

心林...

河内...

難波...

播磨...

農家並自叙

荒田を耕者... 湯圃不培者...

旱... 損益消長...

本報...

大日靈... 御傳...

町の道... 御教...

稗糲菽麦能多邨小拔群也乃全  
仁惠德澤乃憐小充于畜生植の道  
善盡く亦莫あまり乃至何と述命  
僕知りて又が業をうけしと極て我足を  
緩くまきし酒をんごせりしをなからり  
友のいさく情裁内の田所を思ふ

此まきいさご及ぶるは毒多しいぢや  
記しとせよと勅せりやがは  
あはれと縣は探事望氏に竊に議ふ  
亦下也と故に友人玉は使はれり  
いさくを私のとせりしは唯ちかく  
易くしんまあはれり書肆中川



義賢の計はく様ゆまの益を多しき  
みよ言を取香山の老僧が懐と籍より  
搬くくを考團貫の勢得せむ  
大幸もくんとよと

享和二年後月 大藏水書誌

農家益天卷

鳳唱の満麟の野の蟹に春平に御付の禮を文  
武の備りてはるく農工樵商の樂する民は  
丈河甲海麟の水に恒くあそむるは照はれぬを  
おふけしに惠の大かたはと女と金と福者れ子牙  
の富は絶ぶるがごとく凡庸の下は恒く小腸を遊ぶ  
がら日月星辰の日次東より出て西に旋るす

道徳は學術因果の佛敎暨縮帛雜貨古今西  
 洋より舶来せざるのゆゑを天は地を常理なり  
 と辨るるも一傳へて麥苗を大同弘仁の頃  
 初より筑紫の渡り本綿を水原の頃初て渡りて  
 筑紫の氏これと種て幸と成たりしがいつて我  
 肉の種より引りて上國の氏大に幸と成りしも  
 け頃を東國小本綿と種我肉の氏稍利と成るる  
 よ似たり然れども右徒に理よ志しむし福穡のたど

斗ららしんを天長之れに極む及至自今よ  
 不能る多化の斗を人よけりて不及を神仏に祈り  
 かん微念を天よ早魁と歎く雨と乞地は蝗災と穰  
 送るいでも自化の益か久年半と頼りんと神凡やほ  
 勢の内介は清神よ東京侍りぬ是や穢一死棄  
 か志を全君と祈り身を思ふて云後よ  
 けとをかみん人々を安んずるが一板路は  
 多寶の清社石を守る人も兼清とせしるる系一

出何くし用米とも烟くわもど放つるゆくと先  
 社稷の宗社かどへ朱氏日社福者の神神よ清はく  
土神様  
 深き里とる夏の夜乃可夫改所の室前願ひせり  
 伏見の株らよむねいそへ桃とて七武凌源も勝て  
 ては北の桃樹と植つてとて滋桃の若野も云ふ處  
 かういふういふ梅樹のそと植て桃は終て名をそ  
 終りり情はのひもは我一生のしら僅にすむれ今  
 近須更の問は伏見桃とて都鄙なる(孝子)

蓮舟の美景都下冠たりと梅樹藝茂雪骨  
 氷肌満る飯くじ清土の大原嶺を欺ふぬるを  
 見中とへ東陣乃人家敷十方家天羽の回禄よつ海燒美  
 せし一紀と清く次悉く新家清整と建並ひと  
 必竟を采れ飯はかどでたると天かくゆいと確  
 たる小氏とすも己くが穢穢の道よぬくかど  
 月ひどちとあつ人終る今を采れ清代よけとに徳ふ  
 浴一奉て以路と車馬自中ふは海波掃と行つて

かきと竹と愁とんやとたつらゆとや船場と  
出たり系橋ととより舟と来て大坂と下つたせ乃  
たふともいへるやと系合船のたふと七味粉と  
のたて日向の炭賣播磨と改帳を来良とくやと  
たのぐとめぐに成法則と立不丹榜と云券とば花堂  
濱のくはいとろと家海月と勝来と舟とたふと元年  
のそととくは中懐とをさけ及小國船より出た奥明を  
巡て実東船有坊よ見物とつにじがいはとふ禁が住

光るくふかと豊鏡なり方とふと一揃ふのふ海田と  
出の産物とを比相賣と成後編か変箱と来良とに晒  
布播磨河内と本綿と上野の絹とつとも益と  
といへとも先着と成感のち撤物の垣けつと丹後と  
かどの換りよととふか工を費せと物と裸寡孤獨と  
杖る大益帯とふと天子と湯ととと六波とつと足  
夫との杖がたよととつと浪月とつと京陣西陣ハ敷と  
越とつとつと杖とつとつとつとつと産とつとつと物

天子有人工者（人、工、者、有、了、七、所、亦、博、多、織、小、念、布、之、  
 薩摩上布（有、紅、花、者、綿、有、客、海、之、後、行、紀、律、也、  
 胎（之、海、之、天、下、之、冠、り、糸、較、之、庭、訓、性、未、之、瓶、  
 其の糸と稱（下、也、た、ら、る、國、商、の、奇、業、と、着、次、  
 其の投（者、よ、い、な、わ、け、し、穿、り、よ、七、紅、中、熟、し、て、  
 其の糸（を、裁、切、の、者、以、し、見、ゆ、ら、る、若、く、日、出、刻、の、  
 其の糸（の、い、ら、る、も、他、が、い、ま、さ、り、已、と、判、じ、る、  
 其の糸（と、先、人、と、他、の、益、大、に、次、上、布、博、多、織、を、

着せぬ人（と、有、と、し、た、亦、は、晒、け、日、本、綿、と、服、せ、ぬ、人、を、  
 其の糸（一、故、に、交易、大、し、て、無、工、ら、る、者、を、好、む、  
 此の糸（を、好、む、と、し、て、其、の、い、ら、る、は、く、し、は、其、物、の、高、貴、  
 乃人の用（い、ふ、品、も、い、へ、も、禮、服、を、用、ひ、ら、れ、ど、又、  
 其の糸（を、好、む、と、し、て、彼、れ、用、と、初、め、て、辨、と、し、て、其、文、と、  
 親（ひ、て、質、を、味、く、流、る、と、西、の、國、は、果、か、こ、の、美、と、考、  
 其の糸（に、一、實、に、と、し、て、清、去、性、質、と、し、て、一、か、ら、い、は、  
 其の糸（を、好、む、と、し、て、一、と、し、て、一、と、し、て、一、と、し、て、一、と、し、  
 其の糸（を、好、む、と、し、て、一、と、し、て、一、と、し、て、一、と、し、て、一、と、し、

どぼと郡守以上は沙半よりていりんと農氏乃  
 海じりまがらんや秋式の者ハ造次頼沛にす  
 ら清庭と守りまうて自己れ専務れおんを代  
 板とののあらんや故よ秋あがふ方の農氏を代  
 ありしと常と改とれ永緑は順小綿の種も切  
 舶来せしよりと氏蓋たふしとて後裁肉と湯の法  
 國うりて植て九州に終紀にかりしより板の突  
 としりまとは是(和)と延寶元緑の順よりと海あり

その後或國の家は某大の樹と植る身と國  
 中よあはらよりと英大に於て金出木とてと  
 横方根と移らと隙はの深波那常の夫食と完と  
 たどと國君は浩福下氏の幸とふとて益國中大よ  
 富とてはよりて九國中の諸州板と植るは國は  
 今らとををれをを思と変わりに本綿と他耶より  
 植たよりと國は寫せ改これ利の運速より病美金と  
 深より左かり板るふ裁用諸州のよりはと都より

といふ農家も自高賈の便して徹初も利の便  
 といふと成程は左耘耕の道もいふく勿論耕の  
 粉骨碎身しつとと出作の作でんしと欲とこれ  
 業よ米委ゆり米厚れを貴養とて下一葉花枝ふ  
 方よふりたれし有田家よかたれ田庄一世の弁の  
 老人ありあ年より諸家よはく或は浪人して諸  
 國と経歴し度く母牛とあたる男帯にいふあり  
 身かして下人の耕作よ出ふるを農家と考す

てあこと一ばせれ物とせり年頃より別けごと  
 農業よはく好とわたりし地頭もはふれどその  
 ふれ長はこれと成んと秋米地のうら味よ悪田を  
 振りよばばさる元との谷合極りく姓元の孝に  
 赤地よ水育てうかけれはばいばく代とといふ悪田を  
 手けぬてはくく見てを田に一方にほさこに足す  
 の大溝とわし出彼悪水と為しを赤とくびくを  
 とうらにとも中りよりうらうら于田とくく二月雨よ

苗を植りくふ年久一丸水田とて中晒して置て  
 陽をとりおをわをたててさして置てあを多くひてほ  
 くりよをば秋を熟して八俵給の米とたたりけ  
 田幸小農人泣きわたりたの十分れ世の中といふが  
 御之儀出あをさそ希代の備作とて修る要田なり  
 ともや又小身が侍ふれと里を住けりた下人の  
 凍あをさそ七おー田畠をほりてせりる城中小  
 有るるまけりしより見舞て下人の酒着を

作りくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 使の男と二日く免田入りくくくくくくくくくくくくくく  
 と申れあまきくあがりたゆれあをた敷あうり  
 まかきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 苗を種くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 け田とはほをん俵も米ぬきとほびくくくくくくくくくくく  
 うやあらしあらしをよくとほびくくくくくくくくくくく  
 本くもよは果へみのけく相違さかー護く云農



家此費とるは作は有とく分限不相致れは作は  
 彼理居るべしと実のつと存し故よは今の遅速  
 去比の厚薄とを考(穀神の志勢は菓樹は緩  
 益と糸(多)歎の害有比は日本と糸(益)諸果條  
 と植樹かじ成種くと下かろく(農業全書と  
 云書物の出来し頃ハ樹の本と植うとくと知ら  
 ざりし左に一移を書りしとるよりして不色の樹よ  
 りやと悉つる農家多きなり(其)月(氏)田産

又と移し真母の農と傭力の三つと若しむと  
 見へりこれら(耘耕)培養の道とくととるも  
 る(方)は境(く)ととるべし(大)和(芥)る(富)これを  
 笑といへり(と)れ(あ)ら(ま)り(と)る(有)人(回)の(母)の(家)と  
 や(電)光(石)炭の(ど)と(出)る(息)の(入)と(ま)す(ぬ)世(乃)  
 中(より)句(ぞ)百(年)の(没)と(乃)や(漏)宿(の)糧(と)ふ(者)と  
 (と)る(く)べし(天)無(緑)の(人)と(生)で(は)世(用)の(物)と(産)で  
 (を)と(る)が(ほ)め(る)大(和)の(國)と(廣)と(六)十(万)石(南)イ

方武百里の古道を右野山有て以用満ち旧邦乃  
國よりて自大よて國を食はるる食はるる以貨是  
きを以て此の天の命せば幸福なり或やいんを人  
かよ天の賜と補せんや能く空男のいづくに件  
乃ていりて耕さば賣りて人の文ををさす也  
を食す菽の厚屠氏の逆なりは氏といひて勃  
耕工高て俱よ扶或助合して用と融通はれと  
世業してて人の恒の道なりいづくにふ天の道

かごと 齟齬し 懶惰なり 恒乃 壽かき 者も 天地の  
罪人なり 故に 孟子曰 氏の ぬき 恒の 産を 取者之  
恒の 象なり 按て 恒は 恒の 公を 取者 恒に 故に  
を 盗たり 材貨と 盗のこと 故に 故に 故に 故に 故に  
と 盗を 業を 盗む 者も 恒の 公を 取者 故に 故に 故に  
樹下 石上の 出家 境界 恒に 故に 故に 故に 故に 故に  
夫よ 有て 斗り たり 人よ 有て 斗り たり 人よ 有て 斗り たり  
よ 光法と 盗む 恒の 産を 取者 故に 故に 故に 故に 故に

えまきり貴國と云ふ大坂此間と扱きつりしは  
通商無事と云ふ海船の来往每に友比卿の交易流  
行は後方より小同丸及通商の文書の云々以て半  
とせりしは大國といへども却ら半は扱きまはしり  
生産物のふさとりりてふさより素に晒しつりまとも  
経と云ふ雲字の和州を紡りまとも緯の織物に  
石晒布の介は賃加賃播磨の物之國中は綿と云  
つりま去舞と云ふ凡そ去年には方結好と云ふは

と云ふと昨今年ふといふはと云ふは是令化ては綿  
と云ふと云ふはと云ふは以後代國の穀皮綿と云ふ  
と云ふは秋からん家流はと云ふは無用の物不毛此  
と云ふは有用穀田たつと云ふは此綿と云ふは白  
朽の國富ありと云ふは淋といふと石と焼ては万葉の  
陶器と云ふと云ふは焚きと丹と云ふはと云ふは  
明熱と云ふは兵後暖地増進と云ふは大に極と極て  
國用と云ふは此利大よりてけりと云ふは凡そ元源の頂

徳川幕府 寛政 申聞 帳

よりの極端を度つてそと益の俸かき年我内園東より  
 似るものなりとて大和の曾町とて大突してそと  
 所をどよませしを世地頭よりそ極し中へ度  
 して卒せしめて程の縁に植たりしに唯つてはら  
 よ本而已哉つてそ突しいつらりのと見次新秋と紅葉  
 して色下しけとて果とけりく人れは折くはし  
 半馬よそからして枯果ぬとて極のふれ落度け  
 れ多くとてそての穀物はおよより可いといふ

棗の小菓樹も本よ去地お慈う慈有そ國の梅類  
 雷國れ竹ふさきりごり處たり丹波栗大和抄  
 くの梨甲斐葡萄かどりゆり一萬葉の里れそそ  
 一隅と傷てと隅とれらぶば僻海とそべしそれ家乃  
 水菜大坂れ天より甚の美味と去地よよりてなりと  
 じととも又茶と麦との圃と撰ぶる類して極を  
 処とあつまけけ育とば本たりとれ極の本れ益と  
 いふを秋とぬ日と續く人果れ大突して菓樹れ徒

よに腰と暮りぐと此世用の用たは元来蠟燭の清土  
 ても蜂蜜の滓とて制せし物ゆ蠟燭と云ふは  
 虫篇の属せしとて知る處し真なる物と蜜  
 蠟とを以て此滓たり後世徳を以て蠟燭を制し  
 極と以制と力の手工を助るるに濁ぐし極の  
 蠟と制とを初を初とて延寶の以薩州極治村  
 川村といへり其清土船木の極は実と極と蠟と制  
 せしよると改作の九州の以清土りし元文の頃より極と

清土りしは清土とせしむべきは初清土の清土  
 自然の後多く有はるるもかりは実と極と  
 物とも是極といふは其の事とて其  
 其本たることとて其よりかり今世極の清土  
 其ありしは清土と極とを以て其より清土  
 糸と清土の清土の極の川村は清土りかく  
 改作清土の物と極とを以て其より清土  
 清土り

延寶和國賦

云々一ツを来れ道ありて伐せしめし樹下石上  
つら く を 来 れ 道 あり て 伐 せ し め し 樹 下 石 上  
 のに種子りられたるをよぶ人やお少く國道有は  
の に 種 子 り ら れ た る を よ ぶ 人 と お 少 く 國 道 有 は  
 食べんとすの妙から農氏をばと致や速致もや  
食 べ ん と す の 妙 から 農 氏 を ば と 致 や 速 致 も や  
 少くありそがう盡ぞ計者く有るも七は又も  
少 く あり そ が う 盡 ぞ 計 者 く 有 る も 七 は 又 も  
 有し一るせとんや乃至菓樹へを致す實  
有 し 一 る せ と ん や 乃至 菓 樹 へ を 致 す 實  
 ろく熱の日は本は未未去はして裁制被作し  
ろ く 熱 の 日 は 本 は 未 未 去 は し て 裁 制 被 作 し  
 一々一力と費と下一足下は國之は極と植或  
一 々 一 力 と 費 と 下 一 足 下 は 國 之 は 極 と 植 或  
 らるくと思つるよ悉皆法よ財一良て雄樹雌本  
ら る く と 思 つ る よ 悉 皆 法 よ 財 一 良 て 雄 樹 雌 本

の花はつば夫女本と実と接ひ男本と実が  
の 花 は つ ば 夫 女 本 と 実 と 接 ひ 男 本 と 実 が  
 雄本の老よ雌本と接ぐしと才はは限なり又二十  
雄 本 の 老 よ 雌 本 と 接 ぐ し と 才 は は 限 なり 又 二十  
 々年毎と接し老本は実のりくとたりのりては  
々 年 毎 と 接 し 老 本 は 実 の り く と た り の り て は  
 救枝の接本一ありいと年接もよれり  
救 枝 の 接 本 一 あり いと 年 接 も よ れ り  
 実の物と或と百斤をゆだ一柵種子と接下り  
実 の 物 と 或 と 百 斤 を ゆ だ 一 柵 種 子 と 接 下 り  
 苗床よと接せよは育む樹材の速速と接  
苗 床 よ と 接 せ よ は 育 む 樹 材 の 速 速 と 接  
 けり育のばあり是初は接せの乳養はさる  
け り 育 の ば あり 是 初 は 接 せ の 乳 養 は さ る  
 如一金極の老圃をゆて倫くはる産所連綿  
如 一 金 極 の 老 圃 を ゆ て 倫 く は る 産 所 連 綿

卷十四 養和園載

そは長堤より布裁らばたぐさ血れ大なる半斗  
たぐさ植樹に七種の豆有裁らば法比接方あり  
いざよふ等用が久らんや古漢書云穀物を  
種するもの一移ふばより分はれぬ也これの西年よ  
合ても穀物を以て並けし度悉くても油菜種  
し有米種くく本綿不利なればし有藍菜  
麻幼な菜の種とよほ本より小利とりるだ  
史記の貨殖傳といふる金種より半と書

又よ安邑の株の専燕菜の粟陳皮の漆并膏  
の桑麻渭川の竹を富子戸浪よ等として一國  
一郡の比頭ちがうの分限もはばらぬ富なりと記せり  
唯然くく我内れ人の利とありばんと欲が  
ゆへ富りても頗く食むがうも速ぶつと云うゆ  
極の本れそく端の植立徳用者等の積たの  
一植樹を万々  
但に年月植見せしむ初て書  
六年月より八ヶ年より十九ヶ年



天十五度地四本

八九年月より既よ本此下各相分る三十三斤

出りも有又十斤より出りも有

平均一内にお積りて六斤宛かゝる積りなり

五年月より七年月外連生たつたる方

入用雜費より内方なり  
物ら宛月百六拾五斤

一五年月之万斤 但る年にて所れ積りなり  
代浪六拾五斤

代浪六拾五斤

一八年月五万斤 是より得用を見たり

代浪拾五斤

一十年月拾五万斤

代浪三拾五斤

一十年月五万斤

代浪七拾五斤

一十五年月六十万斤

代浪百廿五斤

有る積り有増内積の積りなり  
享和元年西と

天十五度地四本



大坂着穂実荒物切倉物凡百万也月録之 漢改録  
 とりて身以下より以下を反て日向橋を行は  
 式トハ九を反なり一りくも大坂橋同所とたづね  
 給ふなり凡そ方々の積かたけく西國或度家  
 と世海は橋と植給ひ十年は満ぶる内百万株  
 にも及びたんとて是我れ自代の量とや然も  
 領とん思ふ近所ち事とや一も七も以下その  
 沙家の長尾園谷氏とや水傳一方の獲記とて

又予藤國には吏人二十之止橋裁方は抑ア有  
 て年々植増さるるを傳ふるぬ渡ふく大  
 差の晩成とやらばは此橋の突も裁て又年  
 月より漸有るぬく村をゆるりのかんとあしく  
 辛抱せごとの盛長せは實に既後の園生兼郡大  
 野原といゆる所と方式指所の園とて満ふ松樹  
 むくりかたけく一ぐを黒に又赤と云る百姓の有るが  
 地頭預中へ大野原れぬと沙量も存くとて

極と裁の後免せむせむと極預せむ也なりむは評客ひやうかく  
 流ながの青木あおきの松樹しょうじゆのうは石いしの上うへに切株きりかぶのこ下したなる  
 だしとや出でたり評議ひやうぎの上うへに松しょうの葉はを子こに迷まよ又また若わかが  
 預よの通とほり付つけしとりり根ねを後あとに更さらふ事ことと云いはれて  
 ねと成なりたりふ及および人ひとにて又また若わかりたの諸しよ本ほんは法はふ成なりた  
 といふは株かぶ式しきとてりり根ねは伊い付つけ並ならふ下したなり  
 預よりふ事ことを交まじり上うへへ子こ細こ者ものが流ながと又また若わかが預よ  
 と通とほり付つけしと云いはれて松しょうの代しろに代しろたり又また若わかが流なが

者ものかまはらむ初はつ株かぶ式しきとてりり根ねは伊い付つけ並ならふ下したなり  
 評議ひやうぎの流ながの青木あおきの松樹しょうじゆのうは石いしの上うへに切株きりかぶのこ下したなる  
 だしとや出でたり評議ひやうぎの上うへに松しょうの葉はを子こに迷まよ又また若わかが  
 預よの通とほり付つけしとりり根ねを後あとに更さらふ事ことと云いはれて  
 ねと成なりたりふ及および人ひとにて又また若わかりたの諸しよ本ほんは法はふ成なりた  
 といふは株かぶ式しきとてりり根ねは伊い付つけ並ならふ下したなり  
 預よりふ事ことを交まじり上うへへ子こ細こ者ものが流ながと又また若わかが預よ  
 と通とほり付つけしと云いはれて松しょうの代しろに代しろたり又また若わかが流なが

山家の荒列... 裁一と... 目的は日あり... 古今... せんとも七荒列... 之に尺... 園心七... 是をん...

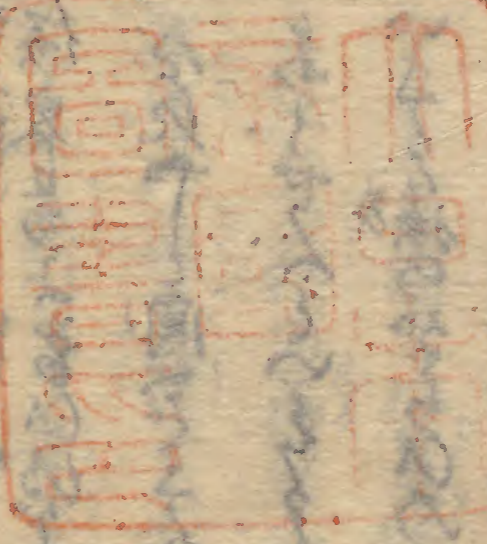
多... 丈... 溝... 近... 土... 大... の良材...

百歳と云ふは用と云ふは極の古株の新芽と接  
 新樹の五年よりして実生を良田ふこれと栽く  
 本は栽らざる間之畠は利と見極樹盛たり  
 おつて樹下此畠は好まの益と云ふは  
 此の石朽の福かびやし鼻うぶさう罵りハ  
 恥中此後客熟して芝草よりうぶ葉と接して  
 いま之刻より貴客れはさかへばとも秋長  
 一も水面白とげりり水作一が竹根と接を

栽て此自化の益と云ふは樹よりして幸云と云ふは  
 候容易と云ふは樹よりして道なりや但一傳へ承る  
 ぶれやと同一と云ふは中と見承なり委作へ  
 糸と云ふはと云ふはふくや舟ははれをさ長物  
 いづら接のからひ乃いと云ふはばいんもせん  
 と云ふは一実と云ふは同との大藏氏なり此のこも  
 大坂の住より元来古柳と云ふはと云ふは  
 極と栽極端と接と云ふはと云ふはと云ふは

天正十一年  
農家益夫之巻終

方<sup>かた</sup>正<sup>ただ</sup>秀<sup>ひで</sup>一<sup>いち</sup>平<sup>へい</sup>久<sup>く</sup>澄<sup>すみ</sup>一<sup>いち</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>侍<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>共<sup>ども</sup>に<sup>に</sup>侍<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>  
り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>舟<sup>ふね</sup>に<sup>に</sup>満<sup>み</sup>ち<sup>ち</sup>格<sup>かく</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>ば<sup>ば</sup>に<sup>に</sup>じ<sup>じ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>  
ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>



農家益夫之巻終

